

平成 27 年度第 6 回 京都市市民参加推進フォーラム 会議録

■ 開催日時：平成 28 年 2 月 17 日（水） 午前 9 時 30 分～午前 11 時 00 分

■ 開催場所：京都市役所 本庁舎第 1 会議室

■ 議題：

（1）第 2 期京都市市民参加推進計画の改定について

（2）その他

■ 公開・非公開の別：公開

■ 議事内容

【出席者】

市民参加推進フォーラム委員 9 名（永橋座長，竹内副座長，石井委員，兼松委員，川島委員，高田委員，野池委員，林委員，壬生委員）

◆ 総合企画局市民協働政策推進室

淀野担当局長，小田市民協働推進室長，北川市民協働担当課長，松村地域づくり推進課長，牧村市民活動支援担当課長，山下市民協働担当係長、黒田

◆ 株式会社地域計画建築研究所

嶋崎，戸田，大河内

【傍聴者】

◆ 4 人

【特記事項】

◆ 動画共有サイト YouTube（ユーチューブ）による会議のインターネット中継を実施

【内容】

1 開 会

<小田室長>

ただ今から「平成 27 年度京都市市民参加推進フォーラム第 6 回」の会議を開始する。進行は総合企画局の小田が務めさせていただくので、よろしく願いしたい。

本日の委員の出席状況は、芝原委員、杉山委員、高垣委員、初田委員、樋口委員がご都合により欠席の旨、お聞きしている。また、高田委員、西村委員、川島委員については遅れて出席されるとの連絡を頂いている。

まず、本日は資料 1～4 をお配りしている。不足があれば、事務局まで申し出ていただきたい。

また、いつもの通り、本日の会議は公開ということで、インターネット上の動画配信サ

ービスによる生中継も含めて実施しているのでご了承願いたい。

それでは、以後の議事については永橋座長にお願いする。

2 議 事

■ 議題（1）第2期京都市市民参加推進計画の改定について

<永橋座長>

年が明けて初めてのフォーラムになるが、本年もよろしくお願したい。

2月は逃げる、3月は去ると言われるように切羽詰まったような状況で、2月1日までパブリックコメントについて委員の皆様にご協力いただいた。本日はパブリックコメントの結果の共有と、計画改定に向けて最終段階に入っている。パブリックコメントやこれまでのフォーラムでの議論を踏まえて、それを改定計画の方に反映させるための議論が本日のテーマとなっている。

では、まず事務局から、パブリックコメントの結果について報告していただきたい。

【パブリックコメントの実施結果について】

<北川課長>

それでは、パブリックコメントの実施結果について報告させていただく。

（資料1について説明）

<永橋座長>

パブリックコメントの結果概要を紹介していただいたが、内容については、Aに分類されたものを改定計画に盛り込むということであり、改定計画の案が出されているので、後ほど、その中でパブリックコメントの提起をどのように活かしたかという詳しい説明をしていただく。

今の説明に対して、意見や質問があればご発言いただきたい。

<兼松委員>

パブリックコメントの実施方法について、郵送やインターネットのフォームでの募集の他に、出前型・対話型パブコメというのを実施している。対話の中から出てくる意見は、何か書いてもらって送られてくるものと質が違うと思うが、どうなのか。対話をする事によって生まれたパブコメと、突然送られてくるパブコメの分類がデータ上では分からなかったの、どのような違いがあるのか伺いたい。もし、熟議を経て出てきたパブコメの

方が建設的だとすれば、そういう場に参加したいと思うし、そういう機会を増やすことも大事だと思う。数稼ぎになるのではなく、質が上がるのであれば良いが。

<北川課長>

資料1のP1に括弧書きで、その場で書いていただいた分の数が上がっている。対面で説明する、あるいはこちらから「市民参加推進計画についての意見募集をしているが、市民参加についての関わりを教えてください。例えば、ボランティア活動に参加したことがあるか」というような問い掛けをして、それに対応しながら、計画を説明しつつ、意見を引き出していくという方法をとっている。

そういう意味では、大学に出講した時は詳細な説明をして、資料を持ち帰って読み込んでから意見を書いていただいたが、そのように計画の内容を読み込んで書かれたものは意見も詳しく書かれていたりする。

逆に、対面型で問い掛けの中で引き出した意見では、例えば「自分もボランティア活動をしていて問題を感じるところがある。そういう点を解決してもらえたら良い」というような、自身の経験に基づく意見がたくさん集められたと思う。

<永橋座長>

意見の一覧表が出ているが、どの意見がメールで送られてきたのか、その場で書かれたのかを分類することはできるのか。

<北川課長>

それは可能である。

<永橋座長>

他に意見がなければ、これから改定の内容を議論する中でパブリックコメントの内容を詳細に検討することになるので、その中でまた気づいた点などを伺いたいと思う。

それでは、事務局から改定のポイント、進捗状況も含めて改定内容を説明していただく。

【改定版について】

<北川課長>

資料2~4について説明させていただく。資料2は計画全体の出来上がりをイメージするために冊子の形でまとめているが、叩き台なので、これから作り上げていかなければならない。全体の構成等を見ていただくためにこのような形で提示している。こちらについて

は今までのフォーラムでの議論、パブリックコメントの市民意見を踏まえた形でまとめた事務局案となっている。資料3は、資料2を作成するに際してのポイントを整理しているので、これに基づいて説明させていただく。

(資料2、3、4について説明)

<永橋座長>

それでは、議論を行いたいと思う。パブリックコメントを踏まえて事務局が改定した内容については、資料3でポイントを整理していただき、特に第3章、第4章について説明していただいたが、お気づきの点や疑問点があればご発言いただきたい。

◆ (1)「視点」の使い分けと、(5)「Pick Up!」の内容について

<壬生委員>

資料3の3「第4章 推進施策」及び「第5章 計画を着実に進めるための推進体制」について、「(1)基本方針2及び3の『フェーズ』を『視点』に変更」とあり、「フェーズ」が分かり難いことも、「視点」に変更した方が良いことも分かるが、改定版のP17に「重視する視点」とあり、「視点」が重なっている。使い方が違うのは分かるが、この「視点」と基本方針のところに出てくる「視点」がどう関係するのか、混乱しないか。

また、同じく資料3の3、「(5)特徴的な事業について」のところで、施策ごとにすでに取り組んでいる特徴的な事業、主にこれからしっかりと取り組んでいきたい事業を「Pick Up!」として記載したとされているが、これだけでは何をピックアップしたのか読んだ人には分からない。例えば、これから力をいれていきたい事業ということが分かるように書いた方が読む側には伝わりやすいのではないか。

<永橋座長>

非常に細かく読み込んでいただいた上での貴重な提議だと思う。

壬生委員からは、「視点」という同じ言葉が違うところで重複して使われているが、区別するべきではないかという意見と、「Pick Up!」はこれから取り組んでいきたい取組、あるいはすでに努力して進めてきた取組を具体的に提起した方が良いのではないかというご意見をいただいた。

他に、お気づきの点、感想等があれば承りたい。

<兼松委員>

「(4)施策を具体化する取組例の追記」がアイデアやこれから取り組みたいことで、「Pick Up!」がすでに実績のあることのような気がするので、ここに載せてしまうとコミットしたことになるのではないかと。確実性はどうか、載せない方がよいのではないかと。

<永橋座長>

これから取り組んでみたいと思えるアイデアでも、ここに書いてしまうと、それに縛られてしまうということか。

<兼松委員>

そうなるので、別紙で「こういうアイデアが出たので、取り組みたい」と挙げるなら良いと思う。

<永橋座長>

具体的に、気になる取組例はあるか。

<兼松委員>

すぐには分からないが、ここに書くとたくさん出てくるのではないかと。逆に、それ以外にたくさんあるかもしれない。(具体例を載せると)イメージは湧くが、「何を根拠に例を絞ったのか」という疑問が出るかもしれない。

<永橋座長>

「なぜ他のアイデアは載せていないのか」と思われるかもしれないということか。

<淀野担当局長>

そういう意味では、壬生委員が言われたように、こちらの意図している表現タイトルにして、「何をもってピックアップしたのか」ということについて、特に重点的に取り組んでほしいとか、新たに取り組んでほしいとか、意思表示をした方が分かりやすいと思う。

<永橋座長>

意図と文脈はそう思う。実は、縛られるものではなくて、他にもいろいろな可能性があることをどこかで見ておいた方が、職員にとっても市民にとっても良いと思う。

他にはどうか。ちなみに、資料4で「A」と示されているものは、資料3に盛り込み済みで、これから反映しなければならないと思われるものは「A（反映予定）」となっているのか。

<北川課長>

「A（反映予定）」はまだ入っていないものである。

<永橋座長>

反映予定のものをどのように反映させるのか、あるいは、反映させなくても良いのかということも含めて、委員の皆様から意見を頂きたいと事務局も考えているようなので、目を通していただきながら、他にお気づきの点を伺いたい。

◆ 「フェーズ」→「視点」という表現について

<永橋座長>

壬生委員が提起された「視点」という言葉の使い分けについて、他に適する用語のアイデアを出していただけると事務局も助かると思うが、いかがか。

<淀野担当局長>

元々は「ステップ」を「フェーズ」に替えたもので、その時の意味合いは「局面」という言い方だった。

<永橋座長>

確かに「局面」だった。循環する、相互にインタラクトするという意味が提起されたが、そういう意味では「発想」か。先ほど北川課長から「発想」という説明もあったと思う。

<北川課長>

「発想」よりも「場面」だと思う。

<竹内副座長>

川島委員にも意見を頂きたいが、100人委員会の対面型のパブリックコメントに参加した時に、冊子の中の全体像の図を説明することが非常に大事だと痛感した。そもそも市民との協働によって未来像までつくることに取り組むわけであり、そのために思い切った情報公開を前提にすることと、対話を大事にするという理念は、頂いたパブリックコメントを

見ても共感してもらっていると感じた。それがこの図になっていて、それぞれの市民の参加を得ようとしていて、「こういう局面で、こういうことを大事にしようと思っている」という図になっていることを伝えると、理解を得られた、伝わったという感じがあった。

したがって、この図が分かりやすくなることが大事で、ここにぶら下がっている具体的に施策の数字付きで書かれていることは、これから進行する中で戻ってくるために書いてある言葉なので、きちんと盛り込まれていれば良いわけだが、何よりも、京都市職員の方々と市民の方々と「市民参加」について共有したいものが伝わること、今もかなり分かりやすいと思うものの、さらにそれがダイレクトに伝わるようなものになってほしいと感じた。

そこが重要な点ではないかと思うので、議論の積み重ねの中で、それは「ステップ」ではなく「フェーズ」だと感じた。より多くの方に伝わると良いと思う。

<川島委員>

私が「ステップ」ではなく「フェーズ」という言葉を使った方が良いと言ったのは、市民が今どのような位置で参加の入口にいるかという見取り図のような意味からである。決して京都市から見てどうなのかという視点ではなく、市民が今どういうところにいるかということを大事にして、「ゴミが気になる」というだけの方も、市民活動に深く関わっている方も、市民活動はいろいろな場面があるので、どの立場にいてもそれを次に進めていくこと、広げていくことはできるという考えから、点や階段ではなく面で広がっていくことを強調したかったので「フェーズ」という言葉を使ったわけである。

つまり、市民側から見た話であり、京都市側から見た視点ではないので、「視点」という言葉が変わったことに違和感があった。あくまでも市民の視点で書かなければならない。今の「視点」という言葉の使い方は、京都市側から見た「視点」という意図でなかったとしても、そのように見えてしまう。

<竹内副座長>

P17の「視点」は良いが、図の中の「視点」は違うと思う。「フェーズ」という言葉が分かり難いならば、「視点」以外にもっと適切な言葉があるのではないかと思う。

<永橋座長>

この点は今回の議論のポイントになると思うので、関連して、他に意見や提起があれば伺いたい。

思考実験で、例えば「参加の場面」とした時に、基本方針2で言えば「フェーズ1」は「場面1」になるが、「市民の関心を市政への参加につなぐ機会の充実」は「場面」ではない。

これを「場面」とするならば、ここにある「未来像」を実現するために「場面」が必要で、いろいろな「場面」が積み重なって最終的には5年後の姿になる。そこに至るまでにいろいろな「場面」ややり取りがあるとすれば、例えば、この基本方針2の「場面1」は、今の「市民の関心を～充実させる」というプロアクティブな方針ではなくて「場面」として「～機会が充実している」ということになる。そういう「場面」をつくるために、その下で「市政・まちづくりを『自分ごと』『みんなごと』と感じられる情報提供の工夫」を行政はするというアクションになる。そういう「場面」をつくるためのアクションという捉え方であれば、「場面」をつくるために行うという示し方は可能ではないか。

<北川課長>

本編 P25 で「視点」という言葉に置き換えしたが、我々も違和感を覚えていたことをご理解いただきたい。そのため、まさに「場面」を表現するにはどうすれば良いかというところで、「視点」と書きながら、その下に「参加が広がる」「参加が深まる」「協働が進む」というそれぞれのシチュエーションを加えている。例えば「市民の関心を市政への参加につなぐ機会の充実」というのは京都市行政が行うアクションとしての方向性の話なので、それはどういう「場面」で使われるアクションが有効なのかという中で、これを補う形で「参加が広がる」という言葉を入れてみたということである。表としてはそのようになっているが、後ろは「参加が広がる～」となると長くなるので、今はアクションだけを記述した形になっている。

<永橋座長>

私が今、思考実験で提起したことは、事務局も考えられていたということである。あとは「このような場面をつくりたいから、京都市はこう動く」ということがしっかりと見えていて、「こういう場면을市民も一緒につくっていこう」というように受け止めてもらえば良いわけである。その点について、どう思われるか。野池委員は気づかれた点はないか。

<野池委員>

「視点」に変えたのは分かりづらいという理由と、パブコメで「フェーズなどの片仮名の言葉は変えた方が良い」という意見を反映されたものだと思うが、他に適切な言葉をなかなか思いつかない。

<永橋座長>

皆で悩みたい。

<兼松委員>

「場面」と言われるのは、より「こうありたい」という理想の姿を言っているのか。「市民の関心を市政への参加につなぐ機会が充実している状況になるためにこれを行う」ということなのか。

<竹内副座長>

計画の下に施策がついてきた時に、その事業を担当する職員が「今はどのフェーズを豊かにするための活動なのか」ということをしっかりと分かってもらうための紐づけをしていると思う。「市民が市政に参加する」あるいは「市民が自主的に活動する」という2つの括りは、それぞれこういう局面があることを川島委員が整理されたものだと思う。「今、どこを豊かにするために、この事業をして、どういう成果を出そうとしているか」という説明が容易になることで、行政側も実感を持って取り組めるし、そのことを市民も受け取りやすくなると思う。

<石井委員>

この冊子自体が、誰に見てもらって、誰に理解してもらって、誰が運用するために作られているのかということが定かではない。職員が見て、職員がこれを基に動くための冊子であるなら、それがどこにも書かれていないし、その上で、市民に対して「これを読んで意見をください」という形になっている。

そうすると、コメントを出されている方々も自分たちに向けて発信されている冊子だと思って意見を出しているのか、職員がこれに基づいて動くための冊子だと思って意見を出しているのかによって、意見の内容は変わってくると思う。そこが私も読んでいて分からなくなった。それがないまま、頂いた意見をそのまま反映しても、市民一人ひとりが分かる言葉を探していくのは難しい。職員に対して「きちんと理解してほしい」ということであれば、職員に対して「フェーズ」という言葉の意味と活用の仕方をどこかに書いけば良いと思う。

<林委員>

私は地区で多くの実践をしているが、いろいろな実践の中で考えると、京都市と住民が情報交換することになっているものの、実際は地元で事業をしているところに京都市の情報もなかなか入ってこないし、職員も来ない。そのため、区役所と一緒に取り組む機会が多い。

そういう中で、今、京都市は施策として空き家問題に重点的に取り組まれているが、東山地区に次いで我々の紫野学区も取組を行った。まず、京都市の空き家対策の部門に応募してほしいと言われ、私は多忙だし、空き家問題は難しいので最初は断った。しかし、「応募だけでもしてもらえないか」と言われたので、「応募だけなら」と申し込んだところ当選してしまい、空き家問題に取り組むことになったわけである。私は地域の社協の会長を務めて6年目になるが、今までいろいろな事業をしてきた中で、この空き家問題が一番苦労している。

それが少し動く気配を見せてきたのは、我々のところは住宅密集地があって危険地帯が多いので、京都市が危険個所の確認のためのまち歩きを1年間かけて行ったことに起因すると思う。私も参加したが、自主防災会に担当委員会が出て一緒に回り、空き家の調査や危険地区の調査を行った。その時に、せっかく京都市の方が来られているから、空き家の問題も一緒に取り組もうということになり、今まで空き家についてのコメントは私の名前で出していたが、そこに京都市の名前を入れたところ信用度が非常に高くなって、相談する人も出てきた。

ただ、我々の地区は西陣織の職人が住んでいたところなので、長屋が多い。例えば、今、京町家は大事にされていて、良い状態で保存できているところはかなりの費用を援助されて、空き家再生が行われているが、我々のところはとてもそのような空き家ではなく、ガタガタでどうにもならないところが多い。例えば、高齢者が夫婦で住んでいて、どちらかが亡くなると1人で置いておけないということで、残った1人を子どもが引き取って、住んでいた家が空き家になる。そして、経済的にそれほど困っていない状況なので、家は放置されてしまう。持ち主を調べていろいろとアプローチをしているが、「少し考えさせてほしい」と言われるだけで、ほとんどの人が返事をくれない。したがって、そういう中でも返事をくれた人は逃がさないようにして、数軒を学生向けのシェアハウスと社会人向けのシェアハウスにする等、空き家事業も進み始めている。

しかし、それは京都市の名前を出したから進んだのであって、私の名前だけでは今のように進んでいないと思う。そういう意味では、市と地域が協働して1つの事業を起こすことは非常に大事だと思う。それについては、市役所はどのような入り方をしてくれるのかと考えている。

また、我々は高齢者の居場所づくりをしているが、これも京都市からやってほしいと言われたもので、75歳以上の独居の人でつくったコーラスグループやカフェもある。非常に先進的な取組と評価され、門川市長が直々に来られて取組を見学された。そして「こういう活動は広げてほしい」と言われたが、実際に事業を行うには、資金の問題が常に出てくる。そういう意味では、いろいろなことを計画されても補助金が出るのか、出ないのか

問題になる。空き家の事業も2年間は補助金が出たが、その2年間で動いた実績はほとんどなく、2年経って空き家が動きそうになった時には、「もう2年経っているから補助は出ない」と言われた。実際は動くためにそれぞれ費用を捻出しなければならないという問題が出てくるので、費用をどうするかという点も考えていただけたら有難いと思う。

<永橋座長>

今の具体的なお話を伺いながら、この見開き2ページの「基本方針3 市民のまちづくり活動の活性化」で、まさに今、林委員が言われたフェーズはどこにあるのかと考えていた。

例えば、「フェーズ1」で、林委員をはじめ、社協や地域の方々がいろいろな活動をされてきて、なかなか上手くいかなかったところが、「フェーズ3」の「多様な主体が連携する協働のまちづくりの推進」において京都市が関わったことで、協働がさらに展開し、活動が進む。さらに、その成果や活動をどう継続していくかというところで、資金も必要だが、それを「フェーズ2」として継続的な活動につながる仕組みを京都市が作る。まさに今、林委員が言われた空き家の利活用プロジェクトは、この3つの局面で語るができると思う。そして、その都度、市役所や区役所が果たすべき、それぞれの局面での役割があるだろうということが確認できた。

したがって、市職員から見ると、例えば自分が林委員と一緒にいったことが3つの場面のどこに当たって、どういう流れで進んだのかが分かるし、地域の方々は「京都市が関わってくれたことで、自分たちの活動の場面がこのように展開してきた」ということを振り返ることができる。そのために必要な名称を議論しているわけだが、いっそのこと「フェーズ」を浸透させるかという話もある。しかし、やはりそれほど日常的に使う言葉ではないというところが悩ましい。

<石井委員>

林委員が言われたことは、「何かをしたい」というどの事業者にとってもあることで、結局はお金の問題に行き着いて、そこから躓く、解散するというのがほとんどである。そういう意味では、これが、職員がそこに対してどう継続していくかを考えるための冊子であるとしたら、一番大事な、最終的にこの全体像を通してどういう社会でありたいのかというところが出ていないと思う。「こうあるべき」という姿勢は出ているが、最終的に、区や市を越えて、それぞれの市民や地域の企業等が連携しながら、地域を盛り上げ、そこから税収が上がっていくところまでを考えなければならないと思う。

それを継続させるために一番大切なのが、永橋座長が言われた「フェーズ2」の中の「ソーシャル・イノベーションの活性化」だと思う。最初に資金を要するところは補助を受け

でも、そこから事業化して、きちんと利益の出る事業体にしていかなければ何もならない。まちづくり、空き家活性と言っても、止まってしまったらそこまで、また新しい人が出てきては同じ部分を繰り返すという、出ては消え、出ては消えの繰り返しになってしまう。やはり、最初に出た人が大きくなって次を育てていこうと思うと、事業化が大事であり、京都産業大学の大室教授が京都市でソーシャル・イノベーションされているようなところが窓口となるような状況をつくらなければならないと思う。

「このような形で事業を行いたい」と言っているところがしっかりと相談できる窓口があって、区をまたいで活動するなら区をまたいで相談を受けることのできる人がいて、しっかりとつないでもらえるところがなければ、せっかく左京区で始めても、それが止まってしまうと、次に南区で行う時にはまた一からになってしまう。それをつなげる人が京都市の本庁の中にいなければならないし、あるいは、本庁を越えて京都府や滋賀県と連携できるところまで考えられる人がいなければ、根が広がらないと思う。実際に、私は右京区、中京区でアニメ活用の地域活性を行っているが、やはり区を越えると連携できなくなり、事業者だけで取り組まなければならないので、そこをしっかりとできるようにすることが必要である。

また、まだまだ職員の中では、上手くいけば成果として取り入れたいけれども、失敗するかどうかわからない時は少し置いて様子を見る人がいる。そこを一步踏み込めるように、失敗しても上司に叱られないシステムが必要である。それがなければ、なかなか動いてくれないのではないかと感じながら活動している。

<永橋座長>

それぞれの局面で、それぞれのアクターが果たすべき役割があるが、それだけでは厳しいので協働が必要になる。その中で、それぞれの局面で京都市がどのように動くのかということが重要になる。

例えば、P45「施策 17：ソーシャル・イノベーションの活性化」はビジネスのように感じるが、先ほどの林委員の提起で言えば、地域のいろいろな取組がどうするのかということ、また、施策 16にあるように、この間もファンドレイジングの話をしてきたし、今の石井委員の提起は非常に重要だが、それはフォーラムでも議論してきたことである。

そういう意味では、それぞれの局面で京都市は何が必要なのかという視点については、【施策を具体化する取組例】というところで、もっと具体的にした方が良いのではないかという意見が壬生委員からも兼松委員からも出ているが、今の石井委員の提起を受けながら、一応そういう構成にはなっているのではないかという確認ができた。

<川島委員>

林委員の活動の話から考えると、ここに書いている「フェーズ 1~3」は活動のフェーズではなくて活動推進のフェーズである。活動のフェーズは、林委員がどの場面にいるかということだが、ここに書いてあるのは、林委員の活動の場面に対して、京都市がどのように推進するかというフェーズである。そうすると、この基本方針をもう一度見直した時に、「市民のまちづくり活動のフェーズ」となっているのは、それで良いのか。

<永橋座長>

先ほど私が提起したのはまさにその点であり、その切り分けはきちんとしなければならない。結局この3つの局面が5年後の将来像を実現するための螺旋運動になっている。この運動を続けていけば、5年後ではなくても実現することはある。将来像をビッグビジョンだとすれば、ここに書いてあるのは、本来、それに至るプロセスを表現したメゾビジョン、あるいはプチビジョンであり、「その場面で京都市はこういうことを充実させる」という書き方になっている。それは実は、局面ではない。

したがって、この間、私の座長としての方針としては、あくまでも京都市の基本計画は京都市役所の計画なので、「京都市がどうするのか」ということを区分けして示した方が分かりやすいと述べてきた。ただ、実際に市民の動きがあるので、京都市だけが「これを行う」という書き方だけでは不十分だろうという共通理解の下で、事務局もそれを意識しつつ、表現に苦労されているのではないかと思う。

川島委員から具体的な案はあるか。

<川島委員>

P25 の事務局が「視点」という言葉を使った図に「参加が広がる」とか「協働が進む」という言葉を入れていただいたが、これも今の「フェーズ」の部分と照合すると「参加を広げる」とか「協働を進める」というように、京都市がどうするかというところが入らなければならない。

<永橋座長>

場面と市のアクションが混在している。市のアクションとして書くのであれば、「参加を広げる」とか「参加につなげる」という表現になる。兼松委員から主語を明確にするべきという指摘があり、「京都市は参加を広げて、市民を参加につなげる」という書き方にすると明確になるが、そうすると市民に「なぜ市にそんなことを言われなければならないのか」

と思われるかもしれないので、市はそれを危惧していると思う。その点の上手い切り分け方はないか。北川課長はどう考えられているのか。

<北川課長>

例えば、厳密な意味で提起する場面であれば、「参加が広がる」「参加を広げる」という時点で、すでにある程度の方向性がついている。純粋な場面で、「参加が広がる」と書いているところを市民活動目線で言えば「仲間を増やす」とか「理解者が広がる」という話になる。そして、活動が継続できるというところで、本来の意味で「フェーズ」という言葉を使うのであれば合うのではないか。そういうところから、我々もどう表現したら良いのかということを考えている。

基本的には、市民の方々にそうなってほしいという期待、また、そう動いてほしいという期待が大前提になっているが、では、そうなるために行政職員である我々はどうするかということを書いているのがこの計画であり、逆に行政職員である我々がこうするから、市民の方々にもこういうことを期待したいということ伝えていきたい。そういう意味では、厳密に言うと「フェーズ」というよりも、すでに方向付けがついていると思う。

<永橋座長>

「京都市はこういう場面をつくり出すために、こういうことを充実させる」という書き方になるということか。

<北川課長>

そういう書き方で、どのように落とし込んだら良いかというところで苦労している。

◆ 「みんなごと」の使い方について

<高田委員>

言葉の問題で、行政や市民を「アクター」と言うなら、市民は「シーン」や「ステージ」という言葉の方が分りやすいのではないかと思う。

また、同様に「みんなごと」という言葉の議論はあったのか。「自分ごと」の議論があったことは覚えているが、「みんなごと」は市長か副市長が入れられたのではないか。

<北川課長>

「自分ごと」という議論はあったが、それだけではなく、他の人にとってもそれが広がるような「みんなごと」にならなければならないという議論はあった。

<竹内副座長>

この（市民参加推進フォーラムの会議の）テーブルでその議論が出たかと言うと、出ていない。

<高田委員>

市長が市長選で盛んに言われていたし、最近、好んで使われている言葉だと思う。先の市長選の新聞報道でも使ったが、『みんなごと』という言葉は聞いたことがない。どういう意味なのか」という話が出た。骨子の最初の方にも「自分ごと」「みんなごと」という言葉が出ていて、「自分ごと」は分かるが、「みんなごと」は皆が理解していると思って使わない方が良いのではないか。P21に『他人ごと』ではなく、自らの暮らしに関わる『自分ごと』として、また自らにも果たす役割がある『みんなごと』として～と書かれており、一応の説明はあるが、「自らにも果たす役割がある『みんなごと』」という説明は分かり難い。報道の時は「市民同士が課題を共有する『みんなごと』」という注釈を入れて説明した。「第1章 はじめに」のところにも出ており、目新しい言葉なので使いたいかもしれないが、皆が分かるだろうと思って使っていたら、理解されないことがある。

しかし、大事なことを言っていると思う。パブリックコメントの73番に『自分ごと』と『みんなごと』を結ぶ仕掛けを工夫する必要がある」という意見が出ているが、その通りだと思う。「自分ごと」と皆が課題を共有する「みんなごと」の距離は難しい。この意見は反映状況Aに分類されているが、どこに反映されているのか。

<北川課長>

事務局としては、「自分ごと」「みんなごと」のコンセプトをもう少ししっかりと説明を盛り込む中に反映させていこうと考えており、高田委員からご指摘いただいた「基本方針1」のところで説明をしたつもりだが、それでも分かり難いというご指摘をいただいたと思っている。

<高田委員>

大事なことだと思うし、「みんなごと」を入れるのは良いと思う。ただ、まず「自分ごと」と考えて、そこから皆が課題を共有する「みんなごと」に至るまでの距離がかなりあって、まさにそこがこれから取り組もうとしているところなので、そこを埋めることが必要である。まず「他人ごと」を「自分ごと」にして、さらに「みんなごと」にするという、それ

ぞれにはかなり距離があることを認識して、一括りに「自分ごと」「みんなごと」と安易に使わない方が良いのではないか。伝わり難い言葉なので、工夫した方が良いと思う。

<兼松委員>

「共汗」という言葉は一般的なのか。

<高田委員>

それも市長が最初に市長選に出た時の公約で標語だった。

<兼松委員>

数年経っているが、今も使われているのか。

<高田委員>

今はあまり使われていない。「共汗」は漢字で書かなければ意味が伝わらないので、あまり普及せず、最近は言われなくなった。今は「みんなごと」を盛んに言われている。(門川市長は)再選されて信任を受けたから良いが、使うに当たっては誰にでも伝わる言葉ではないことを認識しておかなければ、市役所の職員に「みんなごと」と言われても、市民には伝わらない。

<永橋座長>

「自分ごと」を「みんなごと」にするのが難しいというのは、重要なご指摘である。自分だけが問題だと思っているのではなく、他でも問題だと気付くことの重要性は高田委員も共感されていると思うが、先ほどの林委員の事例では、紫野学区ではできたことが区を越えてできないという話があった。本当は紫野で起きている空き家の問題はいろいろなところでも起きているのに、それがまさに「みんなごと」として取り組めないという現実があるわけである。それこそ本当に連携できると、初めて「みんなごと」になるという意見を高田委員から伺った。

そういう意味では、P21の「自らにも果たす役割がある『みんなごと』」という文章の意味はよく分からないし、高田委員の言われた説明の方が分かりやすい。市民同士が「自分ごと」を共有して、共通の課題として「みんなごと」とするという書き方が必要ではないか。貴重なご指摘を頂いた。

◆ 市民普及版の必要性和職員向けの位置づけについて

<竹内副座長>

これは3月末リリースで、冊子になって、事あるごとに市民も目にするものになるのか。

<北川課長>

そうなる。

<竹内副座長>

それであれば、間に合うかどうか分からないが、先ほど石井委員が言われたように、これは京都市の第2期計画の改定版なので、主に京都市が「こう考えた」「こう進める」という書き振りであることをきちんと謳っていただき、本文はその目線で言葉も整理して書いた方が良いと思う。

ただ、要所ごとの欄外に、それを市民側から見るとどうなるのかという視点で書いてはどうか。全体像の図について、P21から細かく取り上げて書いてあるが、もう1つこの図があったとして、市民側から言うところのどのような言葉遣いで、どのような具体的な内容になって、それに加えてパブリックコメントではどういう意見が出て、それによってこういう本文になっているということが示されると、より分かりやすいとイメージできる。しかし、その作業を誰が行うかというのは分からないし、難しいかもしれないが。

<永橋座長>

素晴らしいと思うが、今年度その作業をするのは時間的にもかなり厳しい。それなら来年度のフォーラムで市民普及版を作ってはどうか。私はもう任期が終了するので、ここに残られる方々をお願いしたいところだが、確かにそれはあった方が良いと思う。計画は、策定して終わり、改訂して終わりではなく、今後使っていくものである。計画推進の一翼を担うのがこのフォーラムの役割なので、来年度に市民普及版を作ってはどうかと思う。今年度はスケジュール的に厳しいので、議事録に残して、OBとして私も手伝うが、竹内副座長や川島委員にぜひ頑張ってもらって、作成していただきたい。

<竹内副座長>

計画そのものは市職員に向けて書き終わってもらわなければ、この議論は終わらないと思う。

<永橋座長>

市民参加推進計画の強みは、このフォーラムがあって、計画を“絵に描いた餅”にしないように不断の温かい血を通わす役割を果たすところである。したがって、壬生委員も兼松委員も作成に関わると議事録に書いておいてほしい。

<兼松委員>

喜んで取り組みたいと思うが、それを前提とするならば、これは市職員に向けたものとして切り分けられるのか。

<永橋座長>

先ほどの「フェーズ」の書き方も、「このような状況をつくり出すために、市としてはこれを進める」という書き方ができるかどうかを事務局に確認するが、兼松委員としてはどうお考えか。

<兼松委員>

切り分けた方が良いと思う。これだけの思いがあるのであれば、今年は市職員に向けて書いた方が良いのではないか。

<永橋座長>

事務局としてはどうか。

<北川課長>

ご指摘のように、確かに一貫して、職員がこれを読んで施策を進めていくものというつもりで作成してきたが、一方では、まさに市民参加を取り扱っている計画であるという趣旨から、我々としても市民の行動に期待する部分もあるし、このように市民に感じてほしいという意味で、この計画は市民の方々にも共有していただきたいと思っている。特に、市民の主体的な活動が計画のかなりの部分に書かれているが、それに対しては、行政が「このようにしろ」と言える話ではないので、「こう感じてほしい」「こういうことを伝えたい」という形の書き振りにならざるを得ない。

そのために、我々としてもどこに軸足を置けば良いのか迷うところがあり、確認しているはずだが、いろいろなところでぶれが出ている部分があるのではないかと改めて実感している。

最初に壬生委員からご指摘いただいた、「視点」という言葉の重複、「Pick Up!」の書き方についても、ピックアップは実施がほぼ決まっているもの、取組例はすでにその方向が出

ているものもあれば、こういうアイデアがあるというもの、ここの計画の趣旨を説明するために必要だから考えてほしい」というものも混在しているので、その辺りで書き振りが取組例という曖昧な形になっている。本日のご意見を踏まえて、我々として押すべきところは押した方が良いのかどうか、事務局として書き方を考えたいと思う。

「フェーズ」については、「フェーズ」という言葉を使った上で、石井委員が言われたように「フェーズ」が何を表しているのかをしっかりと説明する。また、「フェーズ」と言いながらも、すでに矢印がついている話なので、もう少し適切な言い方を再度検討するかどうかを考え、皆様とメール等でやり取りをしながら、ご意見を頂きたいと思っている。

その他にも、例えば、地域を越えた連携をどうするか、お金が回る仕組みをどう作るか、ソーシャル・イノベーションの重要性、高田委員からは言葉の使い方について、相手に分かってもらえることを前提にした場合、まだ分かり難いという厳しいご指摘も頂いたので、その辺りについて、もう一度、用語等を精査したいと考えている。本日、多くのご意見を頂いたので、もう少し事務局で作業を進めたいと思っているが、日程的な余裕がないことから、プロセスを皆さんと共有しながら、座長、副座長に判断を仰ぎつつ、事務局で検討する旨、ご承認いただければ有難いと思う。

◆ 全体像の要約版の必要性について

<壬生委員>

P20のA3の全体像は、目的にあった情報をいかに的確に伝えるかということが大事だと思うが、これを見ると文字量がかなり多い。これだけ情報量が多いと、個々の部分に意識が向かってしまい、関係性や大事なポイントが見え難くなってしまう。これから推進計画を考えていく中で、絶対にこの図が大事になると思うので、可能な範囲で情報を厳選した要約版的なものができるの良いのではないかと。

<永橋座長>

ご指摘は理解できる。本来、このような図は右脳を刺激するが、これは左脳を使わされるので、これはこれであっても良いが、それぞれのフェーズが螺旋状に動きながら5年後の将来像を実現するような、右脳を刺激するビジュアルも考えていただければと思う。ARPAKに協力していただくか、それこそアートなので、いま傍聴者として出席していただいているフォーラム委員OBのグラフィックデザイナーの方にも協力いただければと思う。

◆ パブリックコメントの反映について

<野池委員>

パブコメの中で反映予定と書かれているものは、何を基準に判定しているのか。また、3月末までに本当にこれだけの意見を入れ込むことができるのか。例えば、12番は「市会との連携～」という一言が反映すべきとされているが、この会議ではそれについての議論はあまりなかったように思う。なぜ反映するのか、どのような記述になるのかということも関心がある。それに対して、210番は職員の市民参加推進について「現場での日常的な市民参加に対する評価をしていただきたい」という、フォーラムでも議論があった内容だと認識しているが、それがCと判定されているので、その基準を知りたい。

反映すると判定された意見が多いので、文章量がかなり増えるのか。スケジュールの問題もある中で、「フェーズ」の議論だけでかなり時間を要したので、その点を確認したい。

<北川課長>

ご指摘いただいた「市会との連携」については、まちづくりのコンセプトとして「市会との両輪で」と市民参加推進計画の中にも書かれている。そういう趣旨が前計画の冒頭にも書かれていたので、本市のまちづくりのコンセプトの中で、市会との関係性を含めて最初に述べておくことが必要だが、現段階の叩き台にはそれが入っていなかったのも、それを入れるという趣旨である。

基本的にAと判定している意見は、これまでのフォーラムでの議論を踏まえて「この趣旨は盛り込むべき」と事務局が判断したものである。したがって、全く新しい内容を入れるわけではなく、基本的に今までのフォーラムの延長上で「ここに入る必要があるのではないか」と判断したものであり、入れ方についても、意見の文章をそのまま入れるのではなく、そこで出されているアイデアや方向性について説明を足していくように考えており、それほどボリュームが大きくなるとは考えていない。

また、Cの判定は反映しないということではなく、計画の中に文言として書き入れるものと書き入れないものがある。指摘された210番はかなり具体的なことも書かなければならないので、方向性としてはこれに類するところは盛り込んでいるが、ここまで具体的には書けないと判断し、今後の実施の中で考えていくということでCに位置づけている。基本的にCに位置づけているものについても、無視するのではなく、そういう意見が出ているということ踏まえて取組を進めるという趣旨である。

<野池委員>

パブコメで取り入れる意見は、あくまでもここの議論がベースにあるもので、「市会との連携」は元々文言が入っているから入れたということか。

方針がバラバラでは、パブコメで大事な意見が入ってきた時に、会議で集まらない中では議論できないので確認させていただいた。

◆ スケジュールリングについて

<竹内副座長>

3月中にもう一度フォーラムを開催し、リリースする最終版の確認と、今期の終了の場を持たなければならないが、それまでの宿題を洗い出していると思うので、基本理念のところやその表し方については多くの時間を割いて話した。それに乗らなかった中で「ここも直した方が良い」と思う点や、意見の取り扱いに疑問のある点等があれば、ここを出していただいて、後はメールのやり取り等でカバーしつつ完成に向けていくことになると思う。

そういう中で、「第5章 計画を着実に進めるための推進体制」についてはこの場でも取り扱いが難しかったと思うが、1つ1つのコメントではなく、流して読むと、理念や方向性には概ね共感しつつも、「分かり難い」「具体化してほしい」「幅広い層に届いているのか」という意見が繰り返し出ている。

それを解決するために、パブコメを書いてくれる層にはまちづくりカフェ等が知られており、「計画をスタートさせる」「課題を洗い出す」「解決するアイデアを寄せる」というところでは、こういう仕組みが良いと言える状態にまでなっているが、この先の動いた後の周知と評価、それから改善の議論の部分がまだないように思う。それはこのような感じでいつも後ろのスケジュールが薄くなってしまうためである。

元々、周知や市民と一緒に評価も対話で行うとした場合、その時間も見込んだスケジュールリングをしなければならないが、それが見えていない。それを文言にするかどうかは分からないが、市民参加を進めるためには宿題になると思うので、どこかに書いていただければと思う。

<永橋座長>

P52の「取組4」に「成果や課題等を分析し」とあるが、今言われたのは、そのための時間を従前に取るようにバックキャストでスケジュールリングが必要だということか。

<竹内副座長>

体制と、「もっと知っていたら、もっと言えた」という声もあると思うので、どこまで知らせられるか、どこまで一緒に考えられるかということである。

<永橋座長>

まず、まちづくりカフェが、このようなことをやり取りする熟議の良い場になっているということをごどこかに書いておきたい。そういう観点からすると、P52の「取組4」のところに書いてはどうか。フォーラムも委員の中に100人委員会出身の方もおられるので、まちづくりカフェや100人委員会と連携しながら、一緒に評価し、この計画を育てていく、あるいは、来年度に市民普及版を作るということも書いてはどうかと思う。

その中で、熟議のための時間を従前から確保するというのも、ここに入れて良いのではないかと。書こうとするなら、そこまで具体的に書いて良いと思う。そこまで具体的に書くと、今竹内副座長が言われたことも共有できるように思うが、事務局としてのお考えはいかがか。

<北川課長>

「取組4」の「フォーラムの取組」という中で、ご指摘いただいた内容を書くと、次期計画策定にもつながると思う。

<永橋座長>

ポイントとして、ここでは情報の共有と対話で進めていこうとしている。市民参加推進フォーラムは歴代の座長の方々、あるいは委員の皆さん、先輩方が頑張って忌憚のない議論ができるようになっており、まちづくりカフェでもそういうやり取りができる等、情報共有と対話の場ができていますので、この計画の進捗の確認や評価、あるいは新規策定に向けての対話をいろいろな場面で、フォーラムを核として展開していくということは、「取組4」の具体的な今後の取組例のアイデアとして記していただければ良いのではないかと。そして、そのための時間を取りつつというところで、時間の重要性を示していただければ良いのではないかと。

<竹内副座長>

次の計画改定は5年後なので、その2年前くらいから始まるように書いてはどうか。

<永橋座長>

それも事務局の方で引き取っていただいて、今後の具体的な取組のところで表現していただきたいと思う。

◆ 編集について

<兼松委員>

(編集について) 自分が関わったかどうか、よく分からないものになってしまっている感覚があり、私の力不足もあって、胸を張って一生懸命に行ったと言えない部分もあるように思う。いろいろな方法があると思うが、ブラッシュアップしたいと思うところがある。これだけ素晴らしい委員の方々がいるので、個別のミーティングや1人が30分ずつ話すだけでも大いにブラッシュアップされるかもしれない。事前に全部読んでコメントする等、いろいろと気づきがあったので、5年後に向けて考えたいというのは実感した。

<永橋座長>

計画は作って終わりではなく、出してからが始まりなので、これを本当に温かい血の通ったものにしていく、あるいは澄み切った風を通していくという意味では、不断の活動がこのフォーラムにも課せられている。兼松委員にもご尽力いただけたらと思う。

<兼松委員>

市民に届ける版に編集長が必要なら、偏っても良いのであれば、引き受けたい。

<永橋座長>

大きな拍手でお願いしたい。

◆ 「施策を具体化する取組例」と「Pick Up！」の構成について

<淀野担当局長>

私自身の反省になるが、この計画の基本的な位置づけがぶれたのは事実だと思う。

元々、行政がすべき行政計画と言いながら、市民参加で、市民の方と一緒に議論していただかなければ前に進まないということになり、そこで視点がぶれたと思う。それが提言を頂いた後の混乱や、兼松委員が言われたように、ここでの議論が反映されたという実感につながらないことにもなったと思う。

もう一度基本に立ち返ると、フォーラムからの提言を受けて、行政としてしっかりと取り組んでいかなければならないことを書いたものである。ただ、それを進めるに当たっては、特に市民やNPO等、いろいろな主体との協働の取組が必要になるが、そういうスタンスで、主語はあくまでも京都市である。

そこで、思いつきで申し訳ないが、先ほどのピックアップの項目をどう見るかという話について、例えば、「施策を具体化する取組例」は行政が主体的に行うものを例示し、その後の「Pick Up！」で特に市民、あるいはあらゆる主体等と一緒に取り組むものを取り上げるという構成にすると、分かりやすいのではないかと思う。

<永橋座長>

それは両輪の部分も示せるし、京都市の主体的な行政計画であることも示すことができるので、とても良いと思う。

■ 議題（２）その他

◆ 今後の予定について

<永橋座長>

もう 1 回フォーラムがあるということだが、年度末までに何をどうするのか、事務局から説明していただきたい。

<北川課長>

今後のスケジュールとして、改定計画については、本日のご意見を踏まえて改定計画案を作成し、市長に確認をとる。その上で 3 月 17 日に開催予定の市会の経済総務委員会で報告を行う予定である。その後、フォーラムの会議を開催し、市会での意見を踏まえた最終的な計画を確認していただいて、その後に確定版をリリースするという流れで進めたいと考えている。したがって、3 月中・下旬にかけて皆様の日程調整をお願いしたい。

<永橋座長>

会議日程の調整は事務局から委員の皆様の方に伺うので、よろしくをお願いしたい。もし、議論をしていない点等、お気づきの点があれば、前回の教訓も踏まえて、私も SOS を発信するので、その時はご協力をお願いしたい。

<林委員>

私は恐らく 3 月は出席できないと思うので、本日が最後になると思う。欠席が多くて力添えできなかったのが心残りだが、体調の問題もあるので、今回で最後とさせていただく。

<永橋座長>

「フェーズ」を理解する上でも、林委員のこれまでの活動の蓄積は私たちにとって大変な学びになったし、具体と抽象を繰り返す中で、林委員が提起される話はいつも原点に立ち戻らせてくれた。お体を大事にさせていただいて、またお会いする機会があると思うので、その際はよろしくをお願いしたい。拍手をもって感謝の意を表したい。

<北川課長>

高垣委員から京都市外に転出されるということで、任期途中ながら辞任の連絡を頂いている。現在、4月から就任していただく市民公募委員の募集を行っているところなので、皆様から「この方をお願いしたい」と思う人に声をかけていただきたい。このようなことはくちコミが有効であるとの場で確認されているので、是非お声掛けをお願いしたい。募集は3月4日までである。

<永橋座長>

募集要項はもう出ているのか。

<北川課長>

出ている。すでに募集を始めている。

<永橋座長>

それでは、それを使って広げていただきたい。

◆ 傍聴者の意見

<永橋座長>

本日の動画配信の視聴者やツイッターによる発言はあるか。

<事務局>

本日は5名が閲覧し、コメントは1件、リツイートが5件あった。竹内副座長の「パブコメの数、議論して改善するところが書かれていないので考えなければならない」という意見、兼松委員の「偏ったものでも良ければ市民版の編集長を受けても良い」という意見に「いいね」の支持があった。

<永橋座長>

傍聴者は何名来られているか。

<事務局>

4名来られている。

<永橋座長>

このフォーラムは傍聴の方にも意見を頂くことになっているので、一言ずつ頂きたい。

<傍聴者：A>

今回初めて傍聴した。難しい細かい議論が展開されていて、市民目線ではどこに向かっているのかよく分からなかった。5年後の先が見えない。次はどこに行くのか、どこに向かって5年後を見ているのかが分からない。本当はどこに行きたいのかという部分を最初に挙げて、5年後はここ、今はこれをしているという表現を入れた方が良いと思う。

<永橋座長>

本日はどういう理由で参加されたのか。

<傍聴者：A>

たまたま区役所でチラシを見たので参加した。

<永橋座長>

市民公募委員にも応募していただきたい。

<傍聴者：A>

聞いていて分からない部分もあるので、応募して良いものかどうか分からない。

<永橋座長>

このフォーラムは入ってみなければ分からない。入ってみると分かる。

ご意見をいただき、感謝したい。

<傍聴者：B>

OBだが、相変わらず「自分ごと」であり、「みんなごと」にする審議会だと感じた。

<傍聴者：C>

活発な委員会だと感じた。私もパブコメを書いたが、誰に向けたものなのかと思った。よく読むと京都市職員がすべきことを書いていると分かったが、本日の議論を聞いて、市民の役割はしっかりと計画に落とし込んだ方が計画が生きてくると感じたので、来年度に作られる市民への普及版を楽しみにしたい。

<永橋座長>

市民公募委員も是非応募していただいて、仲間になっていただきたい。

<傍聴者：津田>

初田委員の後任の予定だが、どのような形で進められているのかを拝聴するために参加した。市民に対して分かりやすくするために、このように議論されていることに感銘を受けた。次期委員になるが、よろしく願いしたい。

<永橋座長>

よろしく願いしたい。

それでは、議論はここまでとさせていただいて、事務局にお返しする。

<小田室長>

計画の改定版の素案をご提示したが、内容についても、我々の進め方についても、多くのご意見をいただき、傍聴者にも意見を頂いた。策定に向けてはタイトなスケジュールなので、どこまで意見を踏まえたものができるかはこれからの頑張りにかかっているが、できるだけ努力したいと思っている。基本は、市民の目線に立つことを大事にして進めてきたつもりであり、最後までそれはぶれずに進めたいと思っているので、今後ともよろしく願いしたい。

それでは、これで第6回市民参加推進フォーラム会議を終了させていただく。

以 上